

# 学会ニュース

..... 第51号 2006年4月

## 目次

・第28回大会について	.....	1
・共通論題 礼（儀礼・礼儀・作法）を通して見る文明観（仮題）		
	青木孝夫	.....
2		
・事務局より	.....	4

## 第28回大会について

今年度の大会は、来る6月10日（土）、11日（日）に、広島大学・東広島キャンパス（東広島市鏡山）で開かれます。開催校責任者は、青木孝夫幹事です。詳細は同封いたしました大会プログラムをご覧ください。6名の会員が自由論題で発表され、共通論題「礼（儀礼・礼儀・作法）を通して見る文明観」（仮題）では4名の方がご報告くださいます。また、日韓の18世紀学会の交流の一環として、韓国18世紀学会会長金定姫先生をお招きし、特別講演（“Laughter and Mirth: the British Gentlemen's manners in the Eighteenth Century”）を行っていただきます。大変多彩な内容の大会となっております。多数の皆様の参加をお待ちしています。

大会宿泊に関して、日本18世紀学会事務局では大会期間中の5月9日（金曜）と10日（土曜）にお部屋を若干確保しております。宿泊をご希望の方は事務局宛に5月17日（水曜日）までにメール（申込先：日本18世紀学会事務局 E-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp）で、あるいは出欠の葉書にてお申し込み下さい。（先着順となります）

- ・宿泊施設は、研究発表会場と同じ建物（学士会館）にあります。
- ・シングルで3800円です（朝食なしです）。
- ・土日は宿泊施設のレストランは原則的に営業しておりません。朝食は各自でご準備下さい。

★ ★ ★

共通論題 礼（儀礼・礼儀・作法）を通して見る文明観（仮題）

共通論題として広義のマナーとしての「儀礼・礼儀・作法」、総じて「礼」を取り上げました。私自身は礼の思想や実態についての研究者ではありませんけれども、その点は別にして簡単に企画の背景や企画の趣旨を述べます。

十八世紀学会のメンバーは西欧を対象とする研究者が主です。今回、広島大学で共通論題の提題をお引き受けするにあたり、提題者個人の研究領域の重心が日本にあること等が考慮されていたとすれば、少しく均衡を求められたからかもしれません。

そこで、礼を取り上げるのに、東アジアを軸に構想することにしました。これは西を軽んずるためではなく、西を見るのに東アジアという鏡を準備して映すためでもあります。

しかし＜礼＞を取り上げる際、礼の思想に取り組むのでしょうか、それとも礼の社会的風俗的な現象を取り上げるのでしょうか。答えは両者であり、両面の関係です。その際、いかなる言葉で礼を考えるかが問題となります。言語と結びつく礼の観念ないし表象の絡みは歴史社会的に形成されてきたものです。我々にとって漢字の「礼」は、近代ヨーロッパ諸語の翻訳語として意識されるかもしれませんが、中国から学び日本の風土に溶けこんだ礼の観念や社会秩序や風俗現象と深く結びついて思い浮かべられてもいます。その際、中国の古典、例えば『論語』に即しても＜礼＞の用法や概念は多様で一筋縄ではいきません。礼の社会現象とその背後に在る考えや両者の結びつきは伝統的な儒教的概念を越えて、ヨーロッパも含めたより包括的な概念が求められています。

このシンポジウムで、近代的学問の枠からはみ出るように見える礼の考察が進めば嬉しく思いますし、さらには礼の観点から東西文明や文明の全体を考える縁ともなればと思います。そういう次第で焦点は文明ではなく礼ですが、礼の考察の補助線のつもりで「文明論」の視角を定め、これを標記のタイトルに反映させました。

しかし文明論の観点から礼儀・作法を考察するという時、＜文明＞の概念や言語がまた問題となります。当面は西の鏡に照らして東を見ることになりましょう。「文明論の観点からする＜礼(儀礼・礼儀・作法)＞の考察」というシンポジウムの趣旨からは、エリアスの『文明化の過程』がおのずかと思ひ浮かびます。主としてフランス・ドイツの資料を基にエリアスが扱ったヨーロッパに於ける礼儀・作法や規範の流布・洗練に関する研究を、日本をはじめとする東アジアに適用し、礼儀・作法や社交上、外交交渉上の規範の洗練・展開に関する比較文明論的な考察が連想されます。

実際、そうした論考や書物が現われ始めています。また今次の大会の共通論題を考案する際に、昨年日本大学での大会のコーヒー・ブレイクの折りに、イギリスでの *politeness*、*civility*、*manners* などの概念について、それこそ茶飲み話風に会員諸氏と話をしたことに、このたびのシンポジウムの主題は触発されています。そのイギリスについては政治思想の木村俊道氏に報告をお願いしました。

しかし西欧の礼儀・作法の研究がどちらかと言えば対人関係や対外交渉的な交際に焦点を合わす、いわば生者間の作法であるのに対して、漢語「礼」の示す含みには、祀りごととの関係があり、死者との交流・交感があり、天地人の中の天地との関わりも深いものと思われま

す。中国で展開した礼の思想や礼の具体的な制度や風俗現象については中国近世思想の伊東貴之氏に報告をお願いしましたが、中国の礼の思想と実態は、中国内部で展開したのみならず、衛星国であった韓国や日本にも影響をあたえ、あるいはそれらの地域で様々な形で受容されて、今日の国家や社会の基礎を形造っている、と思われま

日本では礼という漢字を日常の言葉として用いていますが、その中身については本家の漢語「礼」をそのままに引き継いだ訳ではなく、むしろ武家の風俗・慣習をはじめとする自前の礼を盛り込んでいます。そのため内外の儒家の目からすると日本の風俗には「礼がない」こととなります。しかしモデルとする文明に照らせば、自分らの礼儀・作法、風俗が野蛮に見える事態は、江戸時代の儒者に限られる訳ではありません。

福沢諭吉は欧米に比して日本は見劣りがし、文明の開化の状態としては「半開」との診断を下していました。その日本も18世紀のイギリスを中心とする西欧の眼からみるとアジアに於ける礼儀の国でした。中国ではなく日本こそが欧米に匹敵する文明国と見えたのでした。日本を訪れた朝鮮通信使は必ずしもそうは見えていません。むしろ中国を模範として学んだ李氏朝鮮こそが礼儀の国、文治の国でした。これらは異文化の視線、とくに外交使節の眼差しに映った日本の姿の問題ですが、そうした視線の背後にあるのは対日本との関係でイギリスあるいは朝鮮が置かれた歴史的政治的な状況だけではなく、それぞれの文化圏が培った文明や礼儀に関する観念や表象の蓄積です。

異文化の視線に映じた18世紀の日本が真実、礼儀の国であったかどうかとは別に、礼儀・作法が広く社会の諸階層に行き渡りだしたことも一方の事実です。内面的な美徳、例えば武士のエートスの変質と並行して、公家や武士の礼儀や作法や教養がカタログ化しました。人々の間では『節用集』のごとき書物が盛行し、マナーは文化商品となりました。マナーが身についたハビトスは文化資本として階層間の移動の手段とみなされました。他方で礼儀・作法の形を通して倫理的な心を培うという礼に拠る教育観が武士のみならず庶民層において流布していきました。江戸の文明と礼や躰の多様な姿については横山俊夫氏に報告をお願いしました。

礼は近世ないし前近代社会に於ける重要な課題でした。しかし、とりわけ日本の場合、近代的な文明観では従来の礼儀・作法は旧体制のものであり、学問藝術に関しても、新時代の新知識新技術即ち欧米のものこそが重要となりました。マナーもまた欧米に倣っています。近代的な文化観や藝術観形成の背後には作法や礼儀の問題が深く関与する問題圏があり、文化的振る舞いとしての作法の整備が国際間の力学に拠った交流を通じて、国の内外でさまざまに進行していたと思われまます。

近代化の過程で生活様式をはじめもろもろが「普請中」であった日本では、明治以降、礼(礼儀・作法)に関する夥しい数の書物が刊行され続けてきました。この十年、日本の読書界でも、何冊かの書物の登場を目にしています。それらは一方で、時代の危機感を示しています。また他方で(何でもありになった私的自由に立脚する)個人と(強制力を伴った法制度に立脚する)国家に関連しつつ、その中間領域での人間社会の交通様式である礼儀・作法の意義に注目しています。前者の中には、現在のマナーの崩壊・モラルの頹廃を嘆き、過去を懐旧するというノスタルジックな姿勢が認められます。そこには過去の日本人の美点に礼儀正しさを挙げ、懐かしむナショナリズムの風潮が感じられます。戦後の50年の反省とともに普請中のマナーやモラルが理想化され、更に十年が経過した最近では、国家や国民の品格が嘆かれるまでになり、国家と死者との関わりが礼の問題ともなっています。たしかに神道にも礼の問題が存しています。

この十年ほどで刊行された書籍は、日々の生活の中で生じる節目節目の交際術に関する規範と規則を示した従来の「冠婚葬祭」の手引き書ではありません。思想や倫理また宗教の課題として礼(儀礼・礼儀・作法)を取り上げていると思われまます。

礼儀やマナーは近代化の過程で重要な実践的課題であったと思いますが、思想的に見れば、主要な考察の対象であった訳ではありません。理由の一つには近代の学問ないし知の

体制そのもののもつ性格があらうと思われます。

上記報告者によるシンポジウムの司会をつとめます私の学問的背景は美学藝術学です。日本に興味を寄せれば、この社会が育んだ礼の藝術としての茶礼や畏敬しあるいは親しむべき自然への挨拶の藝術としての俳句などを考えてもよかったかもしれません。しかし、このたびの提題に際し、こだわるつもりはありませんでした。

むしろ礼は不在の他者をも含む共同体の考察を要求し、また日常的な礼のみならず世界に於ける人生のカイロスへの対処が礼を要請すると思ひます。現代に於いて礼儀を問題とする立場は、理性や正義尊重の近代的学問をこえて、もっと広範な問題意識と知的枠組みを要します。礼は、個人のまた共同体の身心に根ざした、かなり射程の広いコミュニケーションであることによって、現代社会にあって思想的にも考察が要請されている課題の一つだと思われるからです。

礼を巡っては様々に調べるべきまた考えるべき事柄があらうと思ひますし、アプローチも多様でしょう。もとより上記の提題は、私自身の管見に基づくものに過ぎません。個々の発表報告を通して、礼を巡る現象や観念の諸相が、また礼を考察する視角として取り上げた〈文明〉の観念が、少しでも明らかになれば嬉しく思ひます。このシンポジウムを通じて、礼の考察の気運が醸成されればよいと思ひます。

★ ★ ★

## 事務局より

### お知らせ

昨年のハレでの国際学会執行委員会の議事録の正式なものを学会のホームページに掲載いたしました。

### 新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

### 新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくお願ひいたします。

幹事会メンバー：青木孝夫、安藤隆穂、安西信一（常任幹事・年報担当）、井田尚（常任幹事）、伊東貴之（常任幹事）、小田部胤久（代表幹事）、笠原賢介（常任幹事）、金沢美知子（常任幹事）、川島慶子、木村三郎（常任幹事）、小穴晶子（常任幹事）、高橋博巳、寺田元一（国際幹事）、長尾伸一、馬場朗（常任幹事）、堀田誠三、増田真、森村敏己（常任幹事）

会計監査：中島ひかる 濱下昌宏

発行者 日本18世紀学会 代表者 小田部 胤久  
事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1  
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室  
e-mail: [voltaire18th@yahoo.co.jp](mailto:voltaire18th@yahoo.co.jp)  
fax: 03-5841-8958  
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>